

タルコット・パーソンズのモダニティ論

—「パターン変数」図式を手掛かりに—

佐藤成基

1 「組織化された近代」の理論家としてのパーソンズ

パーソンズはすでに過去の存在になってしまったのか。ごく少数者のパーソンズの研究者を除けば、現在、社会学の専門家の間でさえ、タルコット・パーソンズという社会学者の著作をよく読んでいる、あるいはこれから読もうとしている人は決して多くない。時に社会学史上で名前が登場する程度である。パーソンズは最初の著作『社会的行為の構造』の冒頭で、「今、誰がスペンサーを読むのか (Who now reads Spencer)?」と挑発的に問いかけ、スペンサーを批判した (Parsons 1937: 3)。その言葉は今日、パーソンズ自身に向けられている。「今、誰がパーソンズを読むのか (Who now reads Parsons)?」と。

パーソンズが20世紀を代表する社会学者の一人であったことを否定する人はあまりいないかもしれない。しかしその没後、なぜかとも急速に忘却が進んだのはなぜだろうか？¹⁾ パーソンズの理論そのものに忘れられてしかるべき理由があったのか。現在の社会学者にとって、パーソンズ理論には何も学ぶべき点はないのだろうか。私自身は、必ずしもそうは考えていない。パーソンズが読まれなくなっている理由の多くは、パーソンズ理論の内容それ自体というよりも、その読まれ方の問題にあったのではないだろうか。この論文では、そのような観点から、膨大なパーソンズの業績が持つ理論的な意義を適切に汲み取るための「読み方」の一つを提示してみたい。

では、どう読めばよいのか。結論を先に簡単に述べるなら、その答えは「パーソンズ理論をモダニティ (近代) の理論として読む」ということである。

というと、少数ながらパーソンズにある程度明るい人たちから、「何を今さら」という反応が返ってくるだろう。というのは、パーソンズの没

後、1980年代に一時盛り上がった「パーソンズ・ルネサンス」のなかで、ロバート・ホルトン、ローランド・ロバートソン、ブライアン・ターナーらの社会学者がすでに同様の観点からパーソンズの再評価を行っていたからである (Holton and Turner 1986; Robertson and Turner 1989)。しかし、まずこの点はあらためて強調しておかなければならない。なぜなら、日本の社会学界ではこのようなパーソンズ再評価の流れがあったことさえ、ほとんど認識されていないように思われるからである。日本ではいまだに、パーソンズを「構造機能主義」や「システム理論」の名で知られる非歴史的で抽象的な一般理論家であるという理解が根強く残っている。それに対し、「モダニティの理論家としてのパーソンズ」という理解は、歴史的現実を超越した「誇大理論家」としてパーソンズを捉える見方に異論を唱えるところにそのポイントがあった。たしかにパーソンズはシステム概念を社会学に持ち込み、AGIL図式を初めとする様々な理論的概念化を試みた社会学理論家であり、自らを「重度の理論病患者」と呼んでさえいた。しかしながらパーソンズはまた、近代社会の様々な経験的諸問題、例えば戦間期の資本主義の危機、ナチズム、アメリカの民主政治、アメリカの人種問題など、彼が同時代に直面していた様々な問題について議論を行っていた。80年代の「パーソンズ・ルネサンス」は、このように広範な経験的問題への彼の議論から、モダニティの理論家としての像を打ち出すものであった (Mayhew 1984)。また、近代を「批判的」に捉える社会理論家が多いなかであって、近代を独自の規範的視点からポジティブに捉えるパーソンズを、「ペシミズム」や「ノスタルジー」に抗する「リベラルなモダニスト」として評価するものでもあった²⁾。

もちろん本論文は、そのようなパーソンズ理解を踏まえたものではあるが、モダニティの理論家としてのパーソンズ像をもう一段明確化するために、モダニティ概念それ自体を限定し、パーソンズを「組織化された近代の理論家」としてとらえてみたい。

パーソンズが主に問題にした「近代」とは彼自身が生きた時代、すなわち1900年代から1970年代前半までに期間に当たる。この20世紀の最初の三四半世紀は、ドイツの社会学者アンドレアス・レックヴィッツにならって「組織化された近代」と呼ぶことのできる時代である (Reckwitz 2017)。

「組織化された近代」は、19世紀の「自由主義的近代」(ないし「ブルジョア的近代」)の後にくる近代の段階である。「自由主義的近代」は、市

場経済の発展や初期産業化を背景に、身分的拘束から解放と個人の自由（経済的自由や思想の自由）や法の下での平等が新興ブルジョア（市民）階層を主な担い手として実現された時代であった。それに対し「組織化された近代」は、19世紀末の第二次産業革命以後、科学技術が発達し、社会の大規模な組織化が進んだ時代である。高等教育や専門職が広がり、企業は所有と経営が分離し、生産は大規模化し、民主主義も大衆化し、国家は福祉国家、経済に介入する介入国家へと変貌し、シティズンシップは拡充した。また、ファシズムや国家社会主義（ソ連）が出現したのもこの時代である。19世紀には一部のブルジョア階層に限定されていた近代社会の原理は、この時代には社会全般に拡大・浸透した。パーソンズのモダニティ論は、まさにこうした「組織化された近代」の包括的な把握を可能にする（それを主にアメリカ的な観点から見た）理論として捉え直すことができる³⁾。

それに対し、デュルケーム、ジンメル、ヴェーバーといった初期社会学の「古典的」理論学説は、「自由主義的近代」から「組織化された近代」への転換期に位置づけられる。彼らの社会学は、この転換期に発生した様々な「社会的」な問題を扱っている。しかし彼らの活躍した時代には「組織化された近代」はまだ始まったばかりであり、大衆民主主義も、福祉国家も、組織化された大企業も、まだその後の時代（「組織化された」段階の近代）とは規模が異なっていた。第一次世界大戦は「組織化された近代」への移行にとって極めて重要な転機となっているが、この三人は戦争中か戦争直後に他界しているのである。それに対しパーソンズは、1920年代に研究者としてキャリアを出発させ、第二次大戦期から冷戦期にかけてその主要な理論的業績を生み出した。「組織化された」段階の近代社会をパーソンズほど多面的に論じつくした理論家は、彼のほかにはあまり見当たらない。

本論文と近い見地からパーソンズを理解しているのが、山之内靖や高城和義による日本の1980年代の研究である（山之内 1982; 高城 1986）。彼らは20世紀における「後期資本主義」ないし「組織資本主義」の理論家としてパーソンズを捉えていた⁴⁾。しかし、山之内にせよ高城にせよ、そこでの基本的な枠組みはマルクス主義理論であり、その結果社会の把握の仕方はどうしても経済中心になるという狭さがある⁵⁾。パーソンズは「資本主義」という概念自体が20世紀の社会をトータルに捉えるためには不十分であるという認識を持っていた⁶⁾。そこで本論文では「組織化された

近代」というレックヴィッツの概念を用いてパーソンズのモダニティ論を再検討してみることにする。

以下、本論文での筆者の基本的なテーゼは、〈パーソンズ理論は、その最初期から晩年に至るまでの全体を通して、多面的かつ複合的な「組織化された近代」の社会において、その秩序がいかに維持され、またいかに攪乱されるのかを捉えるための有効な分析枠組みとして読むことができる〉というものである。そして、そのようなパーソンズ理論の全体像を捉える際に鍵となるのが「パターン変数」図式なのである。以下このテーゼを、パーソンズの業績を参照しながら検証していくことにする。

2 パターン変数図式とは何か

まず「パターン変数 (pattern valuables)」概念の説明から始めたい。これはパーソンズが編み出した理論的概念の中ではとりわけ有名なものの一つであり、パーソンズ理論全体から切り離されて、この概念だけが紹介されることも少なくない。パターン変数を簡潔に定義すると、「行為者が周囲の状況に直面する際にとりうる5組からなる二者択一の選択肢」ということになる⁷⁾。その5組からなる二者択一の選択肢はここに示した表のようになっている。パターン変数の発想はすでに1939年の専門職に関する論文 (Parsons 1939) の中でその一部が出されているが、体系的に提示さ

パターン変数図式

	X	Y
(1)	感情性 (affectivity) ・ 表出的 (expressive)	感情中立性 (affective neutrality) ・ 道具的 (instrumental)
(2)	無限定性 (diffuseness)	限定性 (specificity)
(3)	特殊主義 (個別主義) (particularism)	普遍主義 (universalism)
(4)	帰属本位 (ascriptive) ・ 資質 (quality)	業績本位 (achievement) ・ 遂行 (performance)
(5)	集団本位 (group-oriented) ・ 公平無私 (disinterestedness)	自己本位 (self-oriented) ・ 私的利益 (self-interest)
	「ゲマインシャフト」	「ゲゼルシャフト」

れたのは1951年の『社会システム論』(Parsons 1951) および『行為の一般理論を目指して』(エドワード・シルズとの共著) (Parsons and Shils 1951) においてである。さらに1953年の『行為理論の作業論文集』(Parsons, Bales and Shils 1953) で一部の選択肢の名称の変更がなされている。この表には、このような時代よっての概念の揺れを含めて記載している。

パターン変数はパーソンズ理論全体にとって極めて重要な位置をしめるものだが、その主な理由のひとつは、これが社会的相互行為における役割期待(社会システム)、行為者に内面化された欲求性向(パーソナリティ・システム)、共有された価値基準(文化システム)の三つのレベルに関して横断的に適用できるものであるところにある。つまりパターン変数は個人の心理的動機づけ、社会の慣行や制度、文化的価値パターンなどの三つのレベルにおいて、その特徴を把握するための概念として利用できるわけである。

それにくわえ、本論文で重要な意味を持つ点は、この概念図式とモダニティ(近代)との関連である。ここで忘れてはならないのは、パターン変数図式がフリードリッヒ・テンニースの有名な「ゲマインシャフト/ゲゼルシャフト」の二分法を土台にしているということである。パーソンズは『社会的行為の構造』のなかで、「分析的リアリズム」の観点から、前近代と近代とをこの単純な二分法に包括して理解することを批判していた(Parsons 1937: 682-694)。このテンニース批判から生まれたのがパターン変数図式だったのである。

パターン変数図式におけるパーソンズのアイデアは、「ゲマインシャフト」に代表される前近代的特質と、「ゲゼルシャフト」に代表される近代的特質をそれぞれ5つの要素に分解し、それぞれが理論上独立に変異する変数と捉えるというものである。前のページに掲載した表で見ると、X列とY列に置かれた5つのパターン変数がそれぞれ独立に変動し、かつ組み合わせられることになる。5組の2変数がそれぞれ組み合わせられる結果、 $2^5 = 32$ 種類のパターンが作られることになる。このようなパターン変数の組み合わせを用いて、ゲマインシャフト的要素とゲゼルシャフト的要素の双方が様々に組み合わせられた複合的な近代社会の編成の様態を明らかにするのが、パターン変数図式の利用法である。

その前提にあるのは、近代社会は決して全面的に「ゲゼルシャフト」化するわけではないというパーソンズ独特の近代認識である。たしかに近代化とともに「ゲゼルシャフト」的な諸要素(形式合理性、契約、私的利益

の追求、選択の自由など)は強まる。だが、近代の社会関係は「ゲゼルシャフト」的要素だけで成り立っているわけではない。「ゲゼルシャフト」的な要素が様々な形で「ゲマインシャフト」的諸要素(愛着、連帯、道徳感情、規範意識、価値へのコミットメントなど)と接合することによって、近代の社会秩序は成り立っているとパーソンズは考えた。そのため彼は、若い頃から近代社会を「ゲゼルシャフト」的側面からのみ捉える社会学理論を常に批判している。例えば、私的利益を追求する合理的個人に基礎を置いた新古典派経済学の市場理論に対する批判は『社会的行為の構造』の根本テーマだった。また、「官僚制的メカニズムが生活全般を休みなく覆い尽くす必然性」(すなわち「官僚制的化石化」)を強調しすぎる点にヴェーバーの「ペシミズム」の根拠を見出して批判を行っている(Parsons 1929: 47-48)。たしかに近代化が進むと、市場経済や官僚制の論理は社会に浸透する。だが、そうであればあるほど「ゲマインシャフト」的論理といかに接合できるのかが問題となる。「近代社会における合理的効率性と共同体の連帯をバランスさせる問題」(パーソンズ 1973)が問われなければならないのである。

「ゲゼルシャフト」的要素と「ゲマインシャフト」的要素との接合には様々な困難が伴う。この双方の諸要素の間の緊張・葛藤が近代社会に独特の不安定性をもたらしている。この近代社会の両義性、そこでの秩序と攪乱、バランス関係の解明・分析こそがパーソンズの社会学理論を貫通するテーマである。そのためにパーソンズは、時代とともに様々な分析ツールを作り出した。行為システム概念、AGIL図式、境界相互交換モデル、シンボリック・メディア等々はパーソンズの「図式主義」を体現した理論図式である。本論文はこれらの諸概念について深入りすることはしない。それに深入りすることは、かえってパーソンズの理論の中心的主題の焦点をぼかしてしまう可能性があるからである。筆者の理解するところでは、どのモデルにおいても通底的に前提にされているのがパターン変数図式である。

モダニティの理論家としてパーソンズが追求した問題を筆者なりにまとめると、以下の三点に集約できる。第一には「ゲゼルシャフト」的系列の諸変数と「ゲマインシャフト」的系列の諸変数とが接合することにより成り立つ社会秩序の維持の解明である。第二は、両系列の要素の緊張・葛藤による社会秩序の攪乱過程の解明である。そして第三に、攪乱された諸変

数間のバランス関係を回復するための「社会的コントロール」の過程の解明である。ここで第一と第二の課題は、研究者の「客観的な観察」に関わるものであるのに対し、第三に関しては研究者自身が当事者とともに社会過程のなかに参与できるものである。パーソンズ自身が、アメリカの第二次大戦参戦、戦後ドイツの占領政策やアメリカの大学問題などで、この「社会的コントロール」の過程に実際に参与している。パーソンズの社会学理論に、このような実践的側面がある点は見逃してはならない⁸⁾。

3 パターン変数図式から見た近代社会の様態 —いくつかの事例から

では、具体的にパーソンズは、パターン変数図式を用いて近代社会をどのように分析していたのか。ここでは、数多い事例のなかの一部を取り上げて紹介したい。

医療専門職

まず、パーソンズ社会学の業績として絶対に落とすことのできないのが医療専門職に関する分析である⁹⁾。パーソンズは1930年代末以後、長らく医者と患者の相互行為に関するフィールド調査に従事しており、それが彼の第一の実証的研究の対象であったというだけではない。医療専門職に関する彼の分析はまた、彼の社会学理論を通底する社会認識の基礎を構成するものでもあった。ここではその意義を、パターン変数図式の観点から整理してみる (Parsons 1951: Chapter X; Parsons 1964a)。

まず、言うまでもないことだが、医療専門職は科学技術の発達、高等教育の発達の結果もたらされた「近代西洋社会の重要な下位システムの一つ」である。そこでは普遍主義、限定的、業績本位、感情中立的 ((1)~(4): Y) という「ゲゼルシャフト」的要素が支配しているはずである。しかし実際に医者が治療行為を行う際には、医者が自らの「私的利益」((5): Y) を超えて患者を「助ける」という「公平無私」な態度 ((5): X) が不可欠であり、また患者の方は医師の治療に自ら進んで（強制によらず）「協力」と言う形で「集合体志向」の態度 ((5): X) が必要である。かりにそうでないと仮定しよう。医者は自らの私的利益追求への関心から、医者資格の条件となっている専門的知識に関する患者との間の格差を利用し、患者から法外な治療費を請求して私服を肥やすことができるだろう。

患者もそういう疑いを医者に対して抱いたならば、進んで治療に協力することもなくなるだろう。そうなったならば、治療のための相互行為それ自体が成立しなくなるのである。とはいえ、医療は単なるボランティア行為ではない。資本主義社会において医師は治療行為から収入を得なければならない点もまた事実である。そこで求められるのは、「自己志向」((5): Y)と「集合体志向」((5): X)のバランス関係であるということになる。

以上は医者と患者の「フォーマル」な役割関係に関することだが、それに加えて相互行為の「インフォーマル」な側面もまた重要である。医療行為は単に「感情中立的」((1): Y)に進んでいくわけではない。そこには様々な情緒的・感情的な関係性((1): X)が介在する。例えば、医師と患者は治療行為のなかで相手に親しみや愛着を感じたり、不快や憤りを感じたりすることは日常的であろう。場合によっては人格的な信頼関係が構築され、それが治療に効果的に作用することもある。しかし、情緒的な投入の強さから両者の間に「特殊主義的」((3): X)で「無限定的」((2): X)な関係が形成されれば、医療における「普遍主義」((3): Y)や「限定性」((2): Y)が侵害されるし、逆に不信や嫌悪の蓄積からくる両者の感情的反発は治療行為それ自体を崩壊させてしまうだろう。治療は専門性をもつ「ゲゼルシャフト」的行為だが、同時に医師は患者との密接な「ゲマインシャフト」的關係性を必要とするため、その「感情性」「無限定性」「特殊主義」とのバランスをとることが求められるのである。

近代産業社会における子供の社会化

人間はこの世に生まれ出た時には単なる「有機体」でしかない。近代産業社会では、その後の「社会化」を通じてその感情中立的で限定的、業績本位で普遍主義的な価値と規範を「内面化」することが求められる(Parsons 1951: Chapter VI; Parsons and Bales 1955)。しかし、子供の最初の社会化の場は家族内での親との間の濃密に「ゲマインシャフト」的な(感情的で無限的な)相互行為である((1)(2): X)。子供はそこで、自己が親とは別の人格であること、欲求の即時的充足を諦める方法、他者の態度への感受性、何らかの価値へのコミットメントの仕方などを学習する(Parsons 1954)。その後近隣社会、学校、仲間集団など家族外での(より「ゲマインシャフト」性が低い)関係性のなかで社会化を続け、やがて業績や普遍主義的観点が求められている一般社会へと参入するようになる(Parsons

1958)。

その過程で子供は、幼児期の親との感情的で無限定的な関係性から離れ、人間としての自立が求められる。しかしそれは、子供に心理的緊張やフラストレーション、不安や恐怖を与えざるをえない。社会の組織化が進み、機能分化と専門性が高まればそれだけ、幼児期の関係性と一般社会での価値規範との間の距離は遠くなり、社会化の過程は困難を伴い、経験する心理的緊張も大きくなる。そのような心理的緊張はまた、般社会の価値規範に対する反発への動機づけを生み出し、社会にも緊張をもたらす。

社会化がもたらす心理的緊張は成人してから後も消滅することはない。社会にはその緊張を「処理」するための様々な仕組みが組み込まれているが(家族の機能の一つもそこにあるとされる)、それだけではとても十分ではない。緊張が累積すればそれが、近代の普遍主義的・業績主義的な価値や規範に反発し、特殊主義や帰属本位の関係性に回帰しようとする「退行」的運動が発展することにもつながる。このように、社会化が内包するパターン変数X系列とY系列の諸要素のアンビバレントな関係性が、近代社会固有の不安定性の源泉になっている。この不安定性をコントロールするには、両系列の要素をいかにバランスよく制度化されるかが鍵となる。

逸脱行動(犯罪集団、下位文化集団)の発生とそのコントロール

逸脱行動とは社会一般において制度化された規範からの離反である。近代社会における離反の多くは、その感情中立的で限定的、そして普遍主義的で業績本位の規範パターンに基づく役割期待に「同調することの困難さ」から生まれる(Parsons 1951: 268 [邦訳: 269])。それは例えば、実績があり専門的能力の高い優秀な人材よりも身内や気心知れた人間を最優先する((2)~(4): $X > Y$)という行動パターンによく見られる。このような逸脱行為の拡大を回避するような社会的コントロールのメカニズムが作用していれば、近代社会はそれなりに安定する。しかし問題は、規範への同調の困難さが、それへの離反的要素の激化と累積的深化を導く集会的過程を生み出しているという点である。それが犯罪集団(マフィアやギャングなど)などの逸脱的「下位文化」的集団(反ユダヤ主義や白人至上主義なども含まれる)の形成である。そこで自己と他者は「共犯者」として相互に働きかけ、離反者による連帯感をつくり、役割期待とサンクションの応酬によって制度化された規範から逸脱した規範パターンへの同調を強迫的に

高めあうという悪循環へと向かう (Parsons 1951: Chapter VII)。

このような犯罪集団による悪循環過程を断ち切るには、それにたいして負のサンクションを与え、逸脱行動が広がらないようなコントロールを働かすことができるような制度化されたメカニズムが必要となる。それは、患者が治療行為から離反していくのを断ち切る「アルキメデスの点」の役割を医者が果たすのと同様である。

しかし、普遍主義や業績本位といった西洋近代的価値規範と相反する価値規範を奉じる下位集団が権力を握るようになる場合もある。ドイツのナチズム (国民社会主義) がその例である。パーソンズは第一次大戦後の西洋近代的価値規範の流入と、依然として強固な封建的身分構造とのギャップからくる緊張が、ナチズムの離反的な動機づけを広げる要因だったとしている (Parsons 1942a)。これをドイツのみならず、西洋文明自体にとっての脅威でもあると捉えたパーソンズは、戦後の占領政策に積極的に関与した。特殊主義と帰属本位が優位する社会へと陥ったドイツ社会を、いかに普遍主義、業績本位が優位する自由で民主的社会へと「再教育」しているのか (3)(4): $X \rightarrow Y$)。パーソンズは、ドイツの産業を解体し、前近代段階の社会へと後退させようというモーゲンソーの提案に反対し、まず産業の復興を進め、そのなかで近代的な価値規範 (普遍主義や業績主義) を社会に根づかせ、その価値規範に従ってドイツ社会自らが徐々に自由な民主主義社会を実現させていくべきであり、連合国による占領はそのような方向へとドイツを導くべきであると主張した (Parsons 1945; Gerhardt 2002: 110-128, 137-144)。

近代産業社会における「無限定的友情」の役割

近代産業社会においては「逸脱的」とされることの多い「ゲマインシャフト」的要素が、その職場の只中に組み込まれ、しかもそれが一定の役割を果たしていることもある。パーソンズが示す以下の例は、近代産業社会の典型とされるアメリカの職業構造のなかに「無限定的友情」という「ゲマインシャフト」的な要素が制度化されている例である。

[アメリカ社会では] とくに男性の場合、たとえばたいていのヨーロッパ諸国よりもいちじるしく高い程度の職業中ものあいだの無限定的な友情が制度化されている。これは、ファースネームの使用、一緒

に「酒を一杯やる」とか、しばしば「冗談をいう」関係などのインフォーマルな社会関係といった仕方で象徴されている。しかし、こうした表出的志向 [=感情的・無限定的] があまりに進みすぎて特殊主義的占有状態になってはいけない。つまり、すべての仲間や同僚に対して比較的公平 [=普遍主義的] に表出的思考を表明する義務があり、それに対して表出的なシンボルと報酬もこのように編成されている。このパターンについての目立った事柄は、その特殊主義におかれた制限、したがってそのパターンと職業体系の普遍主義との統合ということである (Parsons 1951: 418 [訳: 412-3])。

パーソンズの述べるようなアメリカとヨーロッパの違いは現在だいぶ小さくなってはいるが (今日ではドイツでさえ、ファーストネームが使用されることが多くなっている)、ここでの指摘の本質は現在でも有効であろう。感情性、普遍主義、限定性といった規範が重視される職業社会のなかに、こうした「インフォーマル」なコミュニケーションが組み込まれ、それが関係性を「潤滑」にすることに一定の役割を果たすことはある ((1)~(3): $X \Rightarrow Y$)。ただし、これもパーソンズが指摘しているように、そのような「ゲマインシャフト」的要素の「占有状態」になることは許されていない。そうなると、職業組織全体が機能しなくなるからである。問題はここでも、職業組織の「ゲゼルシャフト」的規範とインフォーマルな「ゲマインシャフト」的規範をいかにバランスよく接合することができるのかということである。

「市場の不完全性」と資本主義経済の組織化

スメルサーとの共著である『経済と社会』では、自由主義経済学が言う「市場の不完全性」こそが、組織化された資本主義経済にとって不可欠な意味をもつというパラドクスについて論じている (Parsons and Smelser 1956)。例えば雇用契約では、経済学が想定するような、企業と従業員との間で単に賃金をめぐる、私的利益に基づく道具主義的な交換関係が交わされているだけではない ((1)(2)(5): Y)。それとともに、従業員の職務に対する名誉の感覚と、彼らの組織に対する無限定的な忠誠心や責任感とが交換されてもいる ((1)(2)(5): X)。つまり雇用契約には、賃金支払いに関する経済的意味だけでなく、企業を組織として団結させるための「ゲマイン

シャフト」的機能もあるということになる。さらに企業は賃金の支払いによって単に従業員との間の金銭的な交換関係を行なっているだけではない。従業員への「適切」な支払いは企業に対し、「良い企業」であるという社会的な名声をもたらすことにもなる (Parsons and Smelser 1956: I: 114-123 [邦訳 172-183])。そのような社会的名声は、その企業の製品に対する消費者の購買にも影響を与えることになるだろう。これは一例にすぎないが、このように資本主義経済の領域では、「物質的」な貨幣と財・サービスとの間の交換と同時に、様々な「非物質的」な（「シンボリック」な）要素が交換されているのである。

民主主義社会における「集会的」権力の形成

「私的利益、強制力 (force)、またはその二つの組み合わせだけに完全に依存する政治システムが長期間にわたって安定するという観念を拒否するという観点から私は出発する」(Parsons 1964) と述べているように、パーソンズの政治社会学における中心的テーマは、権力を私的利益追求のための強制力の行使とらえる「功利主義」的権力観 ((5): Y) の批判であった (Parsons 1957; Parsons 1963ab)。この権力観によるならば、権力はそれを行行使する者とされる者との間の「ゼロサム」的な支配／被支配の関係性（一方が他方の犠牲によって成り立つ）を前提にして作動する。しかしパーソンズによれば、複雑に組織化され、また民主主義が大衆化した近代社会において、このような権力概念はあまりに「切れ味」が悪いのである。なぜなら社会は、単に強制や誘引といった「功利主義」的な方法だけで支配できるものではないからである。それに対してパーソンズは、集合体に共有された価値観や規範意識に訴えて人々を自発的に動かす方法の方が効果的であるとする。権力を行使する者とされる者との間には「良き決定」への共通の合意があるため、否定的制裁を用いて不服従者を脅す必要性が低下するからである。特に民主主義が浸透した社会においては、このような「集会的」な権力が効果的である ((5): X)。

しかし、この権力には支持や同調を訴える集合体の範囲をどう設定するかという問題がある。誰をも包摂しうる「普遍主義」な動員を行うこともある一方で、特定の心情や属性をもつ人々にだけ訴える「特殊主義」的な動員に向かうこともある ((3): X or Y)。反共主義によって国民を動員したアメリカのマッカーシズムは、後者の例である。それをパーソンズは、世

界のリーダー的役割を引き受けたばかりのアメリカの政治システムが、国民の絶対的忠誠を取り付けなければならないという強迫的観念に囚われた結果発生したものと分析している (Parsons 1955)。

「社会共同体」とアメリカ国民社会

1960年代後半になって使われ始めた「社会共同体 (societal community)」の概念は、その後のパーソンズの社会学、とりわけそのアメリカ社会論において中核的な意味をもつものであった (Parsons 1964; 1970; 1971a; 2007 [2016])¹⁰。「社会共同体」という一見すると同義反復的な(「共同体」が「社会的」であることなど当然だから)名称も、その発想の源泉がテニースの「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」を組み合わせたもの(つまり「ゲゼルシャフト的なゲマインシャフト」の意味)と見るとその内容が理解しやすくなる。パターン変数図式からパーソンズのマダニティ論を検討しようという本論文の観点からも、この概念は極めて重要な位置をしめている。

まず、「社会共同体」は近代的な「アソシエーション」であり、誰もが自由に加入できるものである((4)(5): Y)。しかしそれは、私的な利害関係によって結ばれた契約とは異なる。私的利益を超えた、「原初的」な動機づけによる愛着や忠誠が共有されていなければその共同体は維持されない((1)(2)(3)(5): X)。このように社会共同体には、パターン変数X系列の変数(「ゲマインシャフト」的要素)とY系列(「ゲゼルシャフト」的要素)とが共に含まれていて、両者が接合したり、拮抗・対立しあったりすることでその独自のダイナミズムが生まれているのである。

このような社会共同体の例としてパーソンズが論じているのが、アメリカ国民社会である。アメリカ社会には、建国以来世界から様々な人間を受け入れ、彼らを成員(国民)にすることと成り立ってきたという「アソシエーション」的側面がある。その結果アメリカ社会は、多様な宗教集団、人種・民族集団を包摂する多元主義的な社会になった。と同時に、その多様な成員全体に共有された、包摂的な連帯や忠誠によって社会の一体性が維持されている。それは多様な出自を持つ人間を受け入れているという面では「普遍主義」的であるが、アメリカ国民社会という固有な共同体を形成しているという面では「特殊主義」的である((3): X&Y)。そのようなアメリカ国民社会の統合を可能にしている制度的基盤がシティズンシッ

ブ、すなわち国民の平等な成員資格と権利の保証のメカニズムであった。

しかしながら、そのような包摂的で多元主義的な国民社会の形成は決してスムーズなものではなく、多くの対立や反動を生んできた。アメリカ国民社会も当初は白人プロテスタントが中心となった特殊主義的で帰属本位の共同体であった。それがいくたの対立・紛争を超え、次第に包摂的で多元主義的な社会へと変化してきた。1960年代の公民権運動はそのような紛争の代表的なものだが、これを通じて黒人は白人と平等な成員としてアメリカ国民社会に包摂されることになったのである (Parsons 1965)。こうして1970年代の時点で、「アメリカの社会共同体はもはや WASP の共同体ではなく、宗教的・人種的に多元主義的な共同体である」(Parsons 1971b [= 1978: 296]) と言えるようになった。しかし、帰属本位・特殊主義と遂行・普遍主義との間の対立関係 ((3)(4): X vs. Y) が収束したわけではない。「現代の危機は社会共同体に集約されている」(Parsons 1971a) とパーソンズが述べる時、そこには多様な人種・エスニシティとアメリカ社会の統合がとの間の緊張が意味されている。

4 社会の進化と「退行」

パーソンズの近代化論は1960年代後半以降、社会進化論として定式化されている。その図式によれば、社会の進化は機能分化、適応能力の上昇、包摂、価値の一般化の四つの次元で進展する (Parsons 1966)。パターン変数図式の観点からこの社会進化論を見ると、おおよそX系列からY系列への移行と解釈することができる。機能分化は「限定性」、適応能力の上昇は「業績本位」、また包摂や価値の一般化は「業績本位」や「普遍主義」と結びつき、「感情中立性」はどの次元にも関連する。

社会進化論における「ゲマインシャフト」的側面は、進化へのバックラッシュとして現れる。Y系列からX系列への反動を、パーソンズは精神分析的に「退行 (regression)」と呼んだり、システム論的に「脱分化 (de-differentiation)」と呼んだりしている。60年代後半に社会進化論を展開する以前から、このような「退行」的現象はパーソンズの経験的関心の中心をしめてきたと言える。例えば、それは1930～40年代のナチズムや反ユダヤ主義に関する研究 (Parsons 1942ab)、戦後ではマッカーシズムについての研究 (Parsons 1955) に示されている。またその後も、学生運動 (Parsons and Platt 1974) やウォーターゲート (Parsons and Gerstein

1975) などが「退行」現象として論じられている。

「退行」的現象はその社会の分極化や解体につながることもあれば、適切な社会的コントロールによって「正常」な路線へと修正されることもある。しかし、パーソンズが注目するのは、この「退行」が、新たな段階に向けた社会の進化への突破口（ブレイクスルー）となるという場合である。その場合「進化」と「退行」とは「弁証法的」な関係性にある（Parsons 2007 [2016]: 451）。ここでは晩年のパーソンズの議論のなかから、アメリカ社会における二つの例を紹介しておこう。一つは70年代の「エスニック・リヴァイヴァル」、もう一つは学生運動の中から発生したカウンター・カルチャーの運動である。

エスニック・リヴァイバルとは、公民権運動の成果に満足できなかった急進派たちが起こした、ブラック・パンサーやブラック・ムスリムなどの運動の台頭をさす。彼らはアメリカ社会の統合を否定し、人種・エスニシティの生得的帰属に基づく特殊主義的連帯へと向かった。特に「政治的に活動的な黒人のかなりの部分は戦闘的分離主義に向かう傾向がある」とパーソンズは指摘する（Parsons 1975 [1977: 401]）。しかし彼は、このような急進的な運動が社会を人種やエスニシティによってアメリカ社会を分極化していくことはないだろうと考える。なぜなら、人種・エスニシティは社会の他の地位と「広い範囲でクロスカット」することにより、「一種の構造的多元主義が作り出され、長期的に見れば分極化は抑制される」からである。その結果、人種・エスニシティは実体的な集団から切り離され、次第に「空虚なシンボル」になっていくだろうとパーソンズは論じた（Parsons 1975 [1977: 404, 390]）。だが、エスニック・リヴァイバルは、人種・エスニシティに基づく帰属やアイデンティティへの社会的な認知度を高め、アメリカ社会をより多元主義的なものへと変化させたのである。また、このような動向は決してアメリカ社会だけに限らない。「アメリカのモデルのようなエスニックな多元主義が近代社会の特質になりつつある」とパーソンズは主張する。「現代世界において、我々が社会共同体あるいは「ネーション」と呼んできたものは、次第にエスニックに同質な実体ではなくなってきた」（Parsons 1975 [1977: 383, 385]）のである¹¹⁾。

カウンターカルチャーとは、自発的な愛の表出による自由恋愛のコミュニケーションを形成しようとする運動を指している。パーソンズはそれを「愛の新宗教」と呼んだ（Parsons 1974）。パーソンズによればこれは、戦後の

大学の民主化と「認知合理性」の急速な拡大に対するバックラッシュとして生まれたものである。「認知的要素と感情的要素との間のバランスをとることなしに、高等教育における社会化は合理化の過程を行き過ぎてしまった」(Parsons and Platt 1973: 191) ことが背景にある。機能分化が進み、大規模に組織化された近代産業社会を「愛の連帯」だけで再編成しようというのは不可能である。だが、この運動は「愛」の意味を再認識させるとともに、自由な感情表出の機会を広げた(例えば、婚姻外の性愛関係の広がりなど)。これをパーソンズは「表出革命」と呼ぶ(Parsons and Platt 1973; Parsons 1974)。「私が出出革命と呼ぶ変動は(中略)、文化的志向の合理的・認知的要素とその制度化の様態との旧来のバランスが変化し、認知的・合理的要素に対して感情的・表出的要素の側に力点が移動するようになることである」(Parsons 1974 [1978: 320] [邦訳: 278頁])。現代では、感情的・表出的要素と「合理的・認知的」構造とをいかにバランスさせるのが課題であるとパーソンズは述べる。

5 「組織化された近代」から「後期近代」へ —パーソンズ理論の可能性を問う

「慎重なモダニスト」としてのパーソンズ

パーソンズ理論における社会進化は、絶えず「退行」を挟みながら、パターン変数のX系列からY系列へとジグザグに発展していくと考えられている。ファシズムやレイシズムなどの「ゲマインシャフト」的な反動のモメントを経ながらも、合理性と業績主義、自由と民主主義、多元主義と寛容といった近代的な価値規範に支えられる社会へと最終的には「進化」していくだろうというわけである。なぜそういえるのかについては明確に説明されていない。その前提にあるのは西洋近代的な価値理念に対するパーソンズの揺るぎないコミットメントだったと言ってよい。その点において、彼を「リベラルなモダニストとして」として再評価することも十分に理解できる。

「パーソンズ・ルネッサンス」において打ち出された「リベラルなモダニスト」としてのパーソンズ像は、グールドナーなどに代表されるそれ以前の「保守主義者パーソンズ」という見方(ないし偏見)を修正するという意味があった。筆者はこのようなパーソンズ像が誤っていると考えているわけではない。しかし、そのような規範化された(「政治的に正しい」)

イメージだけで理解してしまうと、本論文で論じてきたような、不安定なバランス関係から成り立つ近代社会の秩序の解明のために構築されたパーソンズ理論の重要な部分が見過ごされてしまうように思える。彼は、近代の合理的で普遍主義的な価値規範の浸透がもたらす心理的緊張、そこから生まれる反発・反動にも目を向け、社会の諸要素のバランス関係の変化をマクロ、ミクロの両面から理論化する努力を続けた。そのため彼は、社会的な緊張を倍加させるような急激な変化や、バランスを欠いた過激な急進主義を支持しない。そのような彼の立場をあえて一言で評するとすると、「慎重なマダニスト」という名称がより適切であろう。そのような彼の立場は、60年代の学生運動から見ればやはり「保守的」に見えたりし、実際にそう振る舞うこともあっただろう。だが現在、それを無条件で否定的に捉えるべきではない。評価すべきは、そのような彼の理論がもつ、近代社会に対する視野の広さである。

「後期近代」とパーソンズ理論

1で紹介したレックヴィッツは、1980年代に組織化された近代は終わり、「後期近代」の段階に入ったと論じている。彼によれば、「一般的なもの」「標準的」を中心的な編成された「組織化された近代」は、「個別なもの」「特異なもの」に価値が置かれる「後期近代」へと転換した。そこでは「自己実現」や「個性」、「差異」や「文化コミュニタリアニズム」が重視されるようになる。レックヴィッツはそれを「特異性の時代 (Gesellschaft der Singularitäten)」とも呼ぶ (Reckwitz 2017)。パターン変数を用いていうならば、「普遍主義」や「業績本位」の価値規範が後退し、「特殊主義」や「帰属本位」の価値規範が優位に立つ時代になったと言い換えられる。

たしかに先進諸国では、1980年代以後の経済自由主義の復活やグローバル化によって社会の組織化が弛緩し、それとともにアイデンティティの政治の拡大や宗教・民族右翼の台頭がみられた。ロバート・アントニオもすでにこのような近代の変化を「普遍主義から部族主義へ」という表現を用いて論じている (Antonio 2000)。

もっとも、「後期近代」における変化を単に「AからBへ」という一方向的な図式で理解するのは単純に過ぎる。現在、「普遍的なもの」と「個別的なもの」は、規範的にも経験的にもほぼ同等な立場で対抗しあっている。

ると見る方がより現実的である。現代欧米で見られる左派のコスモポリタニズムとポピュリスト右派のナショナリズムとの対抗関係などはその例である。とはいえ、このような「後期近代」においては、パーソンズの社会進化論が自明なものと想定していた、最終的には普遍主義的パターンが特殊主義的パターンの優位に立つという「リベラル」な前提は問い直されなければならない。だが、この前提を取り去ってしまうと、パーソンズの理論自体が成り立たなくなってしまうことにもなる。

そうであるならば、「後期近代」に入った現代（そう主張するレックヴィッツの議論が正しかったとして）、本論文で論じてきたような「モダニティの理論」としてのパーソンズ理論をどう活かしていけばよいのか。ここではとりあえず考えられる2つの立場を示しておきたい。ひとつは、パーソンズ理論をすでに過ぎ去った「組織化された近代」の理論に特化させてしまう方法である。そこでパーソンズ理論は、後期近代と対比させながら1970年代までの近代社会を歴史的に理解するために有効な理論枠組みとなる。もうひとつは、パーソンズの理論に内在しているY系列の優位性の前提を取り払い、X、Y両系列の拮抗とバランスの関係を焦点を当てた、後期近代を含む「近代」全体を包括的に捉える社会理論としてパーソンズ理論を再編成するという方法である¹²⁾。彼の相互行為論に深く根付いている精神分析的諸概念（本論文では問題にすることができなかった）をどう捉えるかなど問題は多々あるが、今後のパーソンズ理論の可能性の一つとして指摘しておこう。

本論文は最初に「今、誰がパーソンズを読むのか」と問いかけることから始めた。本論文で論じてきたようなパーソンズ理論の理解の仕方に同意が得られるかどうかは別にして、今、なお読むに値するユニークな着想がパーソンズ理論には豊富に内包されていることを少しでも示すことができたのであれば、この論文のとりあえずの目的は達成されたと考える。

注

- 1) 兼子論と徳安彰はパーソンズの著作・論文の引用数を数量的に検証し、日本、ドイツとも1980年代にパーソンズの引用数が低下していることを示している（兼子・徳安 2012）。
- 2) 日本でも1980年代以後、高城和義がハーバード大学のアーカイヴスに残された資料をもとにしてパーソンズの個人史的背景を探りつつ、資本主義、医

- 療、ファシズムやアメリカ政治、人種問題、大学問題など様々な領域でのパーソンズの業績を明らかにした(高城 1986など多数)。また、油井清光や進藤雄三は、ロバートソンやターナーの議論を受けながら、モダニティの理論としてのパーソンズ理論の可能性を追求している(油井 2002; 進藤 2006)。
- 3) パーソンズ自身は大恐慌期までの欧州が先導した近代を「初期近代」、戦後アメリカが牽引した近代を「完全近代 (full modern)」と呼んでいた(Parsons 1971a)。本論文での区分はそれとややずれるが、ほぼ対応している。
 - 4) アメリカの歴史学者ハワード・ブリックはパーソンズの理論を明確にアメリカ「組織資本主義 (organized capitalism)」の理論とみなし、それを第一次大戦後のアメリカ社会経済史の中に位置付ける興味深い試みを行っている(Brick 2006)。
 - 5) 山之内は1990年代に入って総力戦体制論を展開し、第一次、第二次両大戦によって近代社会は「階級社会」から「システム社会」へと転換するという議論を行うようになった。そこでパーソンズ理論は「システム社会」の理論家として位置づけられている(山之内 1995)。他方、高城は1986年の著作より後、「組織資本主義」とパーソンズ理論との関係性にはほとんど言及しなくなった。
 - 6) 「資本主義」という概念がもつ射程の狭さについては、パーソンズがドイツに留学中に執筆した博士論文以来のテーマであった(Parsons 2019)。
 - 7) パターン変数についての入門的な解説については佐藤(2017)を参照されたい。
 - 8) このようなパーソンズ社会学の実践的側面については、Buxton (1985)、高城(1992)、Gerhardt (2002)などで明らかにされている。また、近年Konno (2019)もこの点に光を当てる論文を発表している。
 - 9) パーソンズの医療社会学については高城(2002)が詳しい。
 - 10) 「社会共同体」概念は、パーソンズ理論のなかでも近年最も注目されているものの一つである。例えばGerhardt (2001)、佐藤(2001)、Sciortino (2016)などの論考がある。
 - 11) この問題については佐藤(2004)で論じた。参照されたい。
 - 12) 近代の「アンビバレンス」に注目した進藤のパーソンズ解釈は、楽観的なリベラル・モダニストとは異なったパーソンズ像を提示している。筆者の解釈もこれに近い。だが、さらに進藤は、ジクムント・パウマンのモダニティ論との類似性について興味深い指摘も行なっている(進藤 2006)。

参考文献

(欧米語文献)

- Antonio, Robert J., 2000, After Postmodernism: Reactionary Tribalism, *American Journal of Sociology* 106 (2): 40-87.
- Brick, Howard, 2006, *Transcending Capitalism: Visions of a New Society in Modern American Thought*. Cornell University Press.
- Buxton, William, 1985, *Talcott Parsons and the Capitalist Nation State: Political Sociology as a Strategic Vocation*. University of Toronto Press.
- Gerhardt, Uta, 2001, Parsons's Analysis of Societal Community, in A. Javier Trevino, ed., *Talcott Parsons Today: His Theory and Legacy in Contemporary Sociology*. Roman and Littlefield.
- , 2002, *Talcott Parsons: An Intellectual Biography*, Cambridge University Press.
- Holton, Robert J. and Bryan S. Turner. 1986. *Talcott Parsons on Economy and Society*. Routledge.
- Konno, Minako, 2019, Talcott Parsons and the Social Role of Sociology, 『東京女子大学社会学年報』第7号：57-70頁
- Mayhew, Leon H., 1984, In Defense of Modernity: Talcott Parsons and the Utilitarian Tradition, *American Journal of Sociology* 89(6): 1273-305.
- Parsons, Talcott, 1929, "Capitalis" in Recent German Literature: Sombart and Weber II, *Journal of Political Economy* 37: 31-51.
- , 1937, *Structure of Social Action*. Free Press [厚東洋輔ほか訳『社会的行為の構造』1～5 木鐸社].
- , 1939, The Professions and Social Structure, *Social Force* 17: 457-67.
- , 1942a, Democracy and Social Structure in the Pre-Nazi Germany, *Journal of Legal and Political Sociology* 1: 96-114.
- , 1942b, The Sociology of Modern Anti-Semitism, in Isaacque Braeber and Steuart Henderson Britt, eds., *Jews in a Gentile World*, Macmillan.
- , 1945, The Problem of Controlled Institutional Change: An Essay in Applied Social Science, *Psychiatry* 8(1): 79-101. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1951, *The Social System*. Free Press [佐藤勉訳『社会システム論』青木書店].

- , 1954, The Incest Taboo in Relation to Social Structure and the Socialization of the Child, *The British Journal of Sociology* 5(2): 101-117. (Reprinted in *Social Structure and Personality*, Free Press, 1964 [武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社])
- , 1955, “McCarthyism” and American Tension: A Sociological View, *Yale Review* 44: 226-45. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1957, The Distribution of Power in American Society, *World Politics* 10: 123-43. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1958, Social Structure and the Development of Personality, *Psychiatry* 21 (4): 321-40. (Reprinted in *Social Structure and Personality*, Free Press, 1964 [武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社])
- , 1963a, On the Concept of Influence, *Public Opinion Quarterly* 27: 37-62. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1963b, On the Concept of Political Power, *Proceedings of the American Philosophical Society* 107: 207-20. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1964a, Some Theoretical Considerations Bearing on the Field of Medical Sociology, in *Social Structure and Personality*, Free Press, 1964 [武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社]
- , 1964b, Some Reflections on the Place of Force in Social Process, in Harry Eckstein ed., *Internal War: Problems and Approaches*, Free Press of Glencoe, 33-70. (Reprinted in *Social Theory and Modern Society*, Free Press, 1967)
- , 1965, Full Citizenship for the Negro American? A Sociological Problem, *Daedalus* 94: 1009-1054. (Reprinted in *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969 [新明正道監訳『政治と社会構造』誠信書房])
- , 1966, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*. Prentice-Hall [= 矢澤修次郎訳『社会類型 — 進化と比較』至誠堂] .
- , 1970, Equality and Inequality in Modern Society, or Social Stratification Revisited, *Sociological Inquiry* 40: 13-72. (Reprinted in *Social System and the Evolution of Action Theory*, Free Press, 1977 [『現代社会における平等と不平

- 等—社会成層再論」 田野崎昭夫ほか訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房)
- , 1971a, *The System of Modern Societies*. Prentice-Hall. [=井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂].
- , 1971b, Comparative Studies and Evolutionary Change, in Ivan Vallier ed., *Essays on Trends and Applications*, University of California Press. (Reprinted in Talcott Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, Free Press, 1977 [「諸社会の比較研究と進化的変動」 田野崎昭夫ほか訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房]).
- , 1974, Religion in Postindustrial America: The Problems of Secularization, *Social Research* 41(2): 193-225 (Reprinted in *Action Theory and the Human Condition*, Free Press, 1978 [佐藤成基訳「脱工業社会アメリカの宗教」『宗教の社会学 行為理論と人間の条件 第三部』]).
- , 1975, Some Theoretical Considerations on the Nature and Trends of Change of Ethnicity, in Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, eds., *Ethnicity: Theory and Experience*. Harvard University Press. (Reprinted in Talcott Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, Free Press, 1977 [「人種・民族概念の変化の本質とその諸趨勢に関する若干の理論的考察」 田野崎昭夫訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房]).
- , 2007 [2016], *American Society: A Theory of Societal Community*, Paradigm Publisher [Routledge].
- , 2019, *Kapitalismus bei Max Weber- zur Rekonstruktion eines fast vergessenen Themas*. Springer.
- Parsons, Talcott and Robert F. Bales, 1955, *Family: Socialization and Interaction Process*, Free Press [=橋爪貞雄ほか訳『家族』黎明書房].
- Parsons, Talcott, Robert F. Bales, and Edward A. Shils, 1953, *Working Papers in the Theory of Action*, Free Press.
- Parsons, Talcott and Dean R. Gerstein. 1977. Two Cases of Social Deviance: Addiction to Heroin, Addiction to Power, in E. Sagarin, ed., *Deviance and Social Change*. Sage.
- Parsons, Talcott and Gerald M. Platt, 1973, *The American University*. Harvard University Press.
- Parsons, Talcott and Edward A. Shils, 1951, Values, Motives and Systems of Action,

- in T. Parsons and E. Shils, eds., *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press [=永井道雄訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社].
- Parsons, Talcott and Neil J. Smelser. 1956. *Economy and Society: A Study in the Integration of Economics and Social Theory*, Harvard University Press [=富永健一訳『経済と社会』岩波書店].
- Reckwitz, Andreas, 2017, *Die Gesellschaft der Singularitäten. Zum Strukturwandel der Moderne*. Suhrkamp.
- Robertson, Roland and Bryan S. Turner, 1989, Talcott Parsons and Modern Social Theory – An Appreciation, *Theory, Culture and Society* 6(4): 539-58.
- , eds., 1991, *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, Sage [=中久郎・進藤雄三・清野正義訳『近代性の理論 パーソンズの射程』恒社厚生閣].
- Sciortino, Giuseppe, 2016, American Society and the Societal Community: Talcott Parsons, Citizenship and Diversity, A. Javier Trevino, ed., *An Anthem Companion to Talcott Parsons*. Anthem Press.

(邦語文献)

- 兼子 論・徳安 彰 2012 「タルコット・パーソンズの日本社会学における受容過程の分析：従来のパーソンズ受容の認識に対する『社会学評論』調査による応答」『社会志林』51巻4号
- 佐藤成基 2001 「タルコット・パーソンズの市民社会像——パーソンズ理論における「社会共同体」概念と近代——」『茨城大学政経学会雑誌』21号
- 2004 「多元主義と「シヴィック・ネーション」——パーソンズ理論における国民統合とエスニシティ」富永健一編『パーソンズ・ルネサンスへの招待』勁草書房
- 2017 「パターン変数図式」、友枝敏夫・浜日出夫・山田真茂留『社会学の力』有斐閣
- 進藤雄三 2006 『近代性論再考——パーソンズ理論の射程』世界思想社
- 高城和義 1986 『パーソンズの理論体系』日本評論社
- 1992 『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店
- 2002 『パーソンズ——医療社会学の構想』岩波書店
- パーソンズ、タルコット 1973 「近代社会において合理的効率性をコミュニー的連帯と調和させる問題」『週刊東洋経済・臨時増刊』2月1日号（日本経済

調査協議会主催、1972年11月「現代先進社会の諸問題」国際シンポジウムの記録).

山之内靖 1982『現代社会の歴史的位相』日本評論社

——— 1995「方法論的序論——総力戦とシステム統合」、山之内靖・成田龍一・V.コシュマン編『総力戦と現代化』柏書房

油井清光 2002『パーソンズと社会学理論の現在——T・Pと呼ばれた知の領域について』世界思想社